

# バンジージャンプする

2007(平成19)年2月24日鑑賞(OS名画座)

★★★★



監督=キム・デスン/脚本=コ・ウンニム/出演=イ・ビョンホン/イ・ウンジュ/ヨ・ヒョンス/ホン・スヒョン (IMX 配給/2001年韓国映画/100分)

……『夏物語』と同様に(?)イ・ビョンホンの20代の大学生姿は不自然……? さらに、交通事故で失った恋人が、17年後に赴任した高校の男子生徒に生まれ変わっていたという想定には、いくら「輪廻転生。生まれ変わっても、魂は魅かれ合う」と考えても違和感が……? 出会い、ケンカ、仲直り、初エッチへの雨の有効活用は見事だし、山頂から見る山の風景は美しいが、いくら韓流純愛ブーム中の映画といっても、ここまでヒネラなくてもいいのでは……? また、教師とその教え子の男同士が手を繋いでバンジージャンプするラストシーンについてのあなたの評価は……?

## 不自然さは『夏物語』と同じ……?

イ・ビョンホンは1970年生まれ。したがって、2006年の『夏物語』では36歳の彼が20代の学生役を演じて不自然だったが、2001年の本作でも、31歳の彼がウブな大学生ソ・インウ役として登場しており、やっぱり少し不自然……。

また、『夏物語』では2人が知り合ったのが1969年という政治的激動期だったため(?)、別れ方も不自然だった。他方、本作では2人が出会うのは1983年だが、ここでの交通事故による突然の別れも不自然……? さらに『夏物語』は、イ・ビョンホンが60歳代の老教授になってから再びかつての恋人を探し求めたのに対し、本作は17年後、インウが母校に教師として戻った中で、生まれ変わった恋人(?)に遭遇するというもの……。まあ、いろいろ工夫している点はわかるが、いくら「輪廻転生。生まれ変わっても、魂は魅かれ合う」といっても、かつての恋人が17歳の男子高校生に生まれ変わったというのは、どう見ても不自然……?

コ・ウンニムは「今最も注目されている若手女流脚本家の一人」と紹介されているが、私にはどうも納得できない……。また、本作でデビューを果たしたキム・デスン監督は、青龍賞新人監督賞などを受賞したとのことだが、それも???

## イ・ウンジュの魅力は……？

この映画でイン・テヒ役でイ・ビョンホンのお相手をつとめたのは、2005年2月22日に自殺による死亡が報じられたイ・ウンジュ。1980年生まれの彼女が主役級で登場したのが『スカーレット・レター』（04年）で、ここでは①ワイルドで美しいセックスシーン、②女同士のすさまじい葛藤シーン、そして③見事なピアノやボーカルシーンなど彼女の魅力がいっぱい（『シネマルーム8』104頁参照）だった。ところが、この『バンジージャンプする』では彼女の出演は前半だけで、後半は回想シーンで登場してくるだけだからもともと少し物足りない……？

韓国の恋愛モノ映画には雨の中のシーンが多く（?）、この映画でも冒頭の2人の出会いは、インウがさすかサの中に白いブラウス姿のテヒが突然入ってくるという印象的なもの……。さらにケンカした後、ずっとその場に立ち続けていたテヒのところインウが戻り、いきなり「君と寝たい」という露骨なインウの言葉に対して、テヒが「私も」と答えるのも降りしきる雨の中。恋人となるきっかけや仲直りのきっかけ、そしてラブホテル（といっても、1983年当時の韓国のそれは、うらぶれた旅館の畳敷きの小さい部屋）に入るきっかけに雨は最適（?）だが、残念ながら肝心のテヒを演ずるイ・ウンジュが『スカーレット・レター』の時ほど魅力的に見えないのが残念。海辺を歩き、木陰の中で2人だけでワルツを踊るシーンも、本来なら名シーンとして残るはずだが、ここでもシルエットは美しいものの、イ・ウンジュの美しさがほとんど感じられないのが残念……。

## 教師役はバッチリだが……

雨の日の出会いから深まっていった2人の愛は、今やとても離れられない高みまで到達していたが、韓国の男性には兵役の義務があるから、どうしても2年間は離れなければならない。兵役に就く1983年の今、インウはヨンサン駅でテヒを待ち続けたが、「少し遅れても絶対に待っていて」と言っていたテヒは……？

ここで場面が突然、それまでの1983年から2000年に移行するとともに、カラーもセピア色から明るい色に……。また少し不自然だった20代の大学生と異なり、今教師として母校に戻ってきたインウの教師役はバッチリと決まっている。

インウが国語教師として赴任したセヨン高校の様子は、『マイ・ボス マイ・ヒーロー』(01年)、『シネマルーム 8』23頁参照)、『品行ゼロ』(02年)、『シネマルーム 8』31頁参照)、『マルチュク青春通り』(04年)、『シネマルーム 8』35頁参照)などと同じでいかにも韓国風だが、担任となったクラスの生徒たちから、インウは好印象で迎えられたよう。しかし、担任の生徒の1人イム・ヒョンビン(ヨ・ヒョンス)が登場すると……？

### ヒョンビンはテヒの生まれ変わり……？

ヒョンビンは、同級生の女の子オ・ヘジュ(ホン・スヒョン)と仲良くしている大柄の男子生徒。このヒョンビンはなぜかあのテヒが話していた言葉を口にすうえ、彼のケイタイの着メロはなぜか海辺でワルツを踊った時にテヒが口ずさんでいたメロディ。そして、テヒからインウにプレゼントされたライターがなぜかヒョンビンの手に……。その他さまざまな現象は、ヒョンビンがテヒの生まれ変わりと思わせるものばかり……。

もちろん、テヒは華奢な身体つきの女性だったが、ヒョンビンはインウよりも大柄な17歳の男子高校生。そんなバカな！ と思いつつ、インウの気持が乱れに乱れていくところが、イ・ビョンホンの演技力の見せどころだ。インウは既に結婚して妻も子もいるのだが、最近家は帰ってきてから妻(チョン・ミソン)に対して示す行動は少しヘン……。？ 精神科で診察してもらったところ、異常なしだったが、テヒに対する思いが、今やテヒの生まれ変わりとしか思えないヒョンビンに移っていることは、誰よりもインウ自身がわかっていた。したがって、そんな目が、普通に男性教師が男子生徒を見る目でないことは一目瞭然……。

ある日、ヒョンビンの前で「テヒ、どうして気づいてくれないんだ、俺はお前を感じるのに」と泣き崩れると、その翌日には同性愛追放の壁新聞が貼り出され、エイズ防止を叫ぶ生徒たちは、インウの授業をボイコットすることに……。これも話としてはわかるものの、かなり不自然で違和感が……。

## 美しい山の風景は最高！

この映画はインウとテヒが雨の中で知り合い、少しずつその愛を深めていく姿を前半ですべて示さず、後半の小出しの回想シーンで少しずつ補強していく。また、ヨンサン駅で待つインウの元へなぜテヒが駆けつけてこなかったのかも、回想シーンのタネ明かしに委ねている。したがって、前半の2人の愛の高まりの様子も少し不自然だが、最高に美しいのは2人で立った山頂から見る山の風景。

ここで交わされる会話も、テヒの「私、ニュージーランドに行ってみたい。絶壁から飛び降りる人がいるらしいの」に対するインウの「いいぞ。一緒に死のう」というチグハグなものだが、ラストに至ってそれがどんな意味だったのかが明らかに……？ 私はこの映画には不満タラタラだが、この美しい山の風景は最高！

## やっとな邦題の意味が……。しかし……？

この映画の邦題はそれだけでは何のことかサッパリわからないが、前半の山頂でのインウとテヒの会話でその意味が少し暗示され、ラストシーンでそれが明確にされる。しかし、私にはどうも……。1983年のあの日、なぜテヒはヨンサン駅にやってこなかったのか……。それはテヒが交通事故にあったためだから、やむをえないもの。そして今、学校を追放されたインウは再びヨンサン駅で1人列車を待っていたが、そこに駆けつけてきたのは誰……？

それは、やっとな自分がテヒの生まれ変わりであることを覚ったヒョンビン。そしてインウとヒョンビンは、バンジージャンプをするためにテヒが言っていたニュージーランドへ赴くことに……。今、2人手を握り合って立っている山頂は、かつてインウとテヒが立った山頂と同じように、雄大に広がったバンジージャンプに絶好の風景。そして2人は……？

ここまでネタバレらしをするのはどうかと思うのだが、この映画の不自然さはここまで書かなければ伝えられないため、あえて書いた次第。あなたは、こんな風に女から男へ生まれ変わったことを前提とした(?)恋愛ストーリーをどう思う？ そして、男同士が手を繋いでバンジージャンプに飛び立つラストシーンの評価は……？

2007(平成19)年2月24日記